

夢湧き夢に夢中

第9号

令和7年8月29日 文責：大谷

これまでがこれから決めるのはいい。

これからがこれまで決める。

今年、昭和元年から数えて一〇〇年、そして多くの尊い命が失われた太平洋戦争の終戦から八〇年の節目を迎えた年である。また、日航機の墜落事故から四〇年を数えた年との報道を見て、当時、中学二年生だった時の記憶が鮮明に蘇った。さらに、深刻化する地球温暖化に世界規模で対策するべく京都市で開催されたCOP3（気候変動枠組条約第3回締約国会議）で結ばれた京都議定書の採択からもう二〇年を経たこのこと。連日の酷暑と恐怖すら覚える豪雨を目の当たりにして、この二〇年で一体何が成されてきたのか。行き場のない感情を覚える。「節目」とは、あくまで時の流れの通過点のひとつにすぎないのかもしれないが、一度立ち止まってこれまでのことや、これからのことについて考える機会にしたいものだ。

先日、アニメ映画『火垂るの墓』がテレビで放映されたので、我が家でも親子で視聴することにした。実はわたし、これまでも幾度となく放映されてきた同作ではあるが、最後まで見終えたことがない。なぜなら、この物語に登場する主人公、清太の妹、四歳の節子ちゃんの何とも純粹で健気な姿が、その後の展開を想像すればするほど逆にひどく胸を締めつけるからだだった。

「やっぱり、観るのやめようかな」

この日もせっちゃん（節子ちゃん）の声を聴くなり隣にいた娘に思わず言い放った。また同じように悲しい

思いをするのが怖かったからだ。すると娘がこう切り返してきた。「今日は終戦の日だし、これを観て家族で考えて欲しいってことじゃない？観てみようよ」

物語は戦争末期の兄妹を描いたもので、戦争とは命そのものを奪うだけではなく、そこに生きる人と人とのつながりが断たれるとともに、そこに多くの孤独を生み、お互いに尊重されるべき人権が侵害されていくことを痛烈に感じさせられるものだった。

「何で最後にビルとかの風景が出たの？」

見終わった後、娘が問うてきた。前述の通り、わたしも初めて最後まで見終えたばかりだったので、答えに窮した。しかし、分断や孤独、そして本来尊重されるべき人権の侵害は、当時に限らず、むしろ現代のほうが深刻化しているのではないかと言われているようだと話した（あくまで個人の見解）。そして、もっと豊かに人がつながる平和な社会を願いつつその日は眠りについた。

戦後、混沌とした時代の中で、どんな未来を想像して困難に立ち向かってこられたのか。先人の思いには到底たどり着くことはできないが、八十年経った今こそ、次の十年、二十年先をどうするか考えたい。特に、これまでが平和だったからといって、何をせずともこれからも続くとは限らず、今を生きるわたしたちが次世代へ繋ぐ努力をすることが、戦後八十年の営みをさらに尊いものとしていくのだと思った。つまり、これまでの営みが、これからを決めるのではなく、これからの我々の有り様が、これまでの営みに価値づけていくのである。今週から二学期が始まった。どんな二学期にするのか。大切なのは、当然ながら過去ではなく未来である。

■酷暑や豪雨など心配事の多かった夏休みでしたが、保護者の皆様におかれましては、いかがお過ごしになりましたでしょうか。今週から二学期が始まり、学校にも活気が戻ってまいりました。今学期も合唱コンクールをはじめ様々な学校行事を計画しております。引き続き、本校へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。